

# 日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol. 32 2007 (平成 19 年度) No. 2 平成 20 年 3 月 24 日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局  
〒 161-8539 東京都新宿区中落合 4-31-1 目白大学内 TEL：03-5996-3166 FAX：03-5996-3125  
E-mail：kokusai@mejiro.ac.jp Website：http://www.kokusairikai.com

## 目次

巻頭の言葉 学会長挨拶	1	国際理解教育・奈良研修会の報告	9
第18回大会実行委員長挨拶	2	理事会(各委員会等)から	10
第18回研究大会(富山大会)のご案内	3	「国際理解教育」関連学会の動向	11
大会シンポジウム・特定課題研究	4	会員だより	12
大会自由研究の発表者と題目	5	お知らせ(これからの行事/イベント案内)	15
韓国国際理解教育学会の報告	7	事務局通信	16
国際理解教育・富山研修会の報告	8		

## 巻頭の言葉



### 知の統合に向けて ～第18回富山大会に期待すること～

学会長 多田 孝志

国際理解教育の重大な使命は、地球社会、地球生命系の明日を希望あるものにしていく担い手を育成することにあります。数年前から、こうした使命をもつ国際理解教育の基調に「統合(integrate)の思想」を位置づけてはどうかと考えてきました。統合の思想とは、多様な分野の知見・価値観や体験などが統合されることにより、さまざまな課題が解決できるとの考え方であり、最近医学や工学などの分野で急速に注目されてきています。

この統合の思想を支える主要な理論が複雑系の科学です。複雑系の科学では「自己組織化」と「創発」を重視します。自己組織化とは「ランダム＝でたらめから、秩序＝整然とした状態へと自分で組み上がっていく現象」であり、創発とは「複数の要素が組み合わせられることで、要素一つ一つがもっていた性質からは予想もできない新しい性質が生じること」と説明されています(都甲等 1999)。

21世紀の先駆的な科学論を軽々に論ずることはできませんが、多様なものの出会いは、対立や混乱も生むが、やがて新たな知見や価値を生起させ、発展の要因となっていく

との発想は、多文化共生社会の教育としての国際理解教育に示唆を与えるものと考えます。

本学会は前回の北海道教育大学での大会(大津和子委員長)で、「転換期を迎える国際理解教育」をテーマとした公開シンポジウムを開きました。このシンポジウムでは、教員の資質形成、教員研修、カリキュラム開発、国際理解教育が目指していこうとする市民像の明確化、相互関連性・外部関連性・未来志向性による実践の多様化等について発言があり、論議が深められました。

シンポジウムの論議を受け、学会では、知の統合を基調にした、研究・実践活動を推進していこうとしています。本学会には、優れた教育実践者と多彩な分野の研究者・専門家が参加しています。この学会の特色を生かし、さらに内外の多様な関連団体と連携することにより、「希望ある未来をつくる人間」を育成するための新たな教育の理論が構築され、実践の方途が明らかにされていくと期待します。

今期、研究委員会では、「ユネスコの最近の活動と国際理解教育」、「ことば・音と国際理解教育」「グローバル時

代のシチズンシップと国際理解教育」を3本の柱として研究を継続していきます。また、これらを順次、大会の特定課題研究のテーマとし、会員の皆様と論議を深めていきます。

会員の教育実践力を向上させることを目的とした実践研修会は、2007年度には富山と奈良で「移民」および「ユネスコの世界遺産」をテーマに開催されましたが、今後も全

国各地で年2回の開催を予定しています。

本学会では、会員の参加・協働をなによりも重視しています。第18回富山大学での大会にぜひご参加ください。会場の各所で、多様な見解、思いや感覚、体験が集まり、カオス（混沌）を経て、新たな知見が生まれてくる、大会がそうした知の創造の場となることを願っています。

## 第18回大会実行委員長 挨拶

### 「きときとな魚」を食べに、富山大会へご参加下さい

第18回研究大会実行委員長 田尻 信壹



コンパクトシティ富山市のシンボル「ポートラム」

日本国際理解教育学会第18回研究大会（富山大会）が、6月14日（土）・15日（日）の両日に富山大学を主会場に開催されることになりました。本大会の実施にあたっては、富山市、富山大学、富山県教育委員会、富山市教育委員会、JICA 北陸、とやま国際センターの諸機関からご後援を賜りました。あつく感謝致します。

第18回研究大会では、自由研究発表（6月14、15日午前）、シンポジウム（6月14日午後）、特定課題研究（6月15日午後）等が企画されています。これら大会の内容については、本会報の3～6頁で詳述しますので、ここでは会場となる富山市についてご紹介致します。

富山市は、古代から北陸最大の農耕地帯として栄え、江戸時代には、富山藩13代の居城の築かれた地です。また、古代から交通の要所として岩瀬、水橋などの駅が設けられて来ました。岩瀬は、江戸から明治にかけて北前船による交易で繁栄しました。この地には回船問屋型町屋を代表する森家（国指定重要文化財）が見学できます。また、間近には3km級の連峰を目にすることができます。富山市街から見た立山連峰は雄大で大変美しい姿です。6月は緑に覆われた立山を間近に眺めることができます。このような景色をご覧になったならば、地球環境の大切さを感じないわけにはいかないでしょう。大会参加を機に富山の歴史と自然に接して頂ければと存じます。

富山市は2005年に7市町村が合併し、人口42万人の大都市となりました。この結果、新富山市は面積、人口ともに、富山県のほぼ3分の1を占めることになりました。富山市は、現在、「公共交通を生かしたコンパクトシティづくり」を目指して様々な取り組みを行なっております。地方都市の都市再生計画のモデルとして注目されています。その目玉となっているのが、ポートラム（ライトレール）です。ポートラムは日本初のLRT（次世代型路面電車）で、「富山駅北」駅から海岸部の「岩瀬浜」駅までの7.6kmを24分で運行しています。大会参加の折には、是非ポートラムに乗り、東岩瀬の森家を訪問されることをお奨めいたします。

また、富山湾は「天然の生け簀」といわれるように、海の幸にも恵まれております。6月はホタルイカの季節です。また、シロエビが旬を迎えます。シロエビは水晶のような透き通った姿で、「富山湾の宝石」と呼ばれています。上品な甘みがあり、刺身やかき揚げにすると大変美味しいです。シロエビはほとんど富山県の外に出ない食材ですので、是非食べてみて下さい。富山弁に「きとき」という言葉があります。「新鮮な」とか「生き生き」という意味です。富山大会へご参加頂き、「きときとな魚」をご堪能下さい。

第18回研究大会実行委員会一同、大会の成功に向けて準備に専念しております。富山大会へご参加、心よりお待ちしております。



桜の満開の下で — 富山大学の春



# 日本国際理解教育学会第18回研究大会(富山大会)のご案内

## 日本国際理解教育学会第18回研究大会実行委員会

日本国際理解教育学会第18回研究大会(富山大会)の概要について、ご案内致します。詳細については、過日お送り致しました大会要項「日本国際理解教育学会第18回研究大会(富山大会)のご案内」(事務局HP上にも掲載：<http://www.kokusairikai.com>)をご覧ください。

### 1. 研究大会日程：2008年6月14日(土)・15日(日)

大会1日目 2008年6月14日(土)	大会2日目 2008年6月15日(日)
9:00 受付開始	9:00 受付開始
9:30 自由研究発表	9:30 自由研究発表
12:00 昼食	12:00 昼食
13:00 総会	13:00 特定課題研究
14:00 シンポジウム	16:00 大会終了
18:30 懇親会	

### 2. 会場：富山大学五福キャンパス・人間発達科学部校舎(富山市五福3190番地)

### 3. 富山大学五福キャンパスへの交通(富山駅から富山大学五福キャンパスへのアクセス)

- ①市内電車：「富山駅前」から県庁・大学方面乗車、「大学前」下車(約15分)
- ②バス：富山大学経由(3番乗り場)から乗車、「富山大学前」下車(約15分)
- ③タクシー JR富山駅から約10分  
市電(片道200円)、バス(片道230円)が10～15分間隔で運行していますので、便利です。大学構内の外来用駐車場が手狭なため、自家用車でのご入構はご遠慮下さいますようお願い致します。

### 4. 大会参加費、懇親会費について

- ①大会参加費(事前振り込み)：一般会員3000円、学生会員2000円(当日：一般、学生会員、非会員4000円)
- ②懇親会費：5000円
- ③弁当：1000円(15日、事前申し込み者のみ販売。14日は大学内生協食堂をご利用下さい。当日の受付は混雑が予想されます。事前の振込みをお忘れなくお願いします。

### 5. 懇親会について

2008年6月14日(土)18:30より、富山国際会議場(富山市大手町1番2号)

### 6. シンポジウム

テーマ「学校の中の多文化共生の構築を目指して」  
今日、どの学校でも、教室内に外国人児童・生徒や帰国児童・生徒の姿が一般的に見られるようになりました。マイノリティに対する教育支援、マジョリティに対する共生へ向けての資

質育成が課題となっています。当日は、小学校、中学校、大学の教員養成、地域の視点から提言をいただき、議論を進めます。

### 7. 特定課題研究

テーマ「ユネスコの動向を踏まえた日本の国際理解教育－世界遺産を切り口にしたESD－」

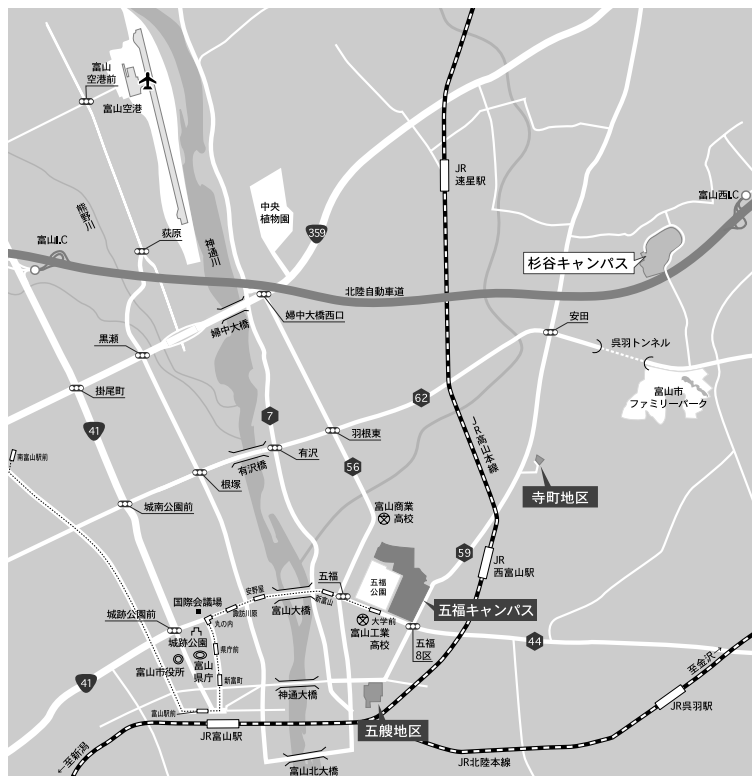
ユネスコはASP-Netを通してESDとWHE(World Heritage Education)の推進を提唱しています。その二つを個別に考えるのではなく、統一して捉えることで教育内容は豊かになります。ユネスコの提起する教育課題と日本の教育現場は、2004年にASP-Netが再設立されるまで疎遠でした。富山大会では、ユネスコの動向を踏まえた国際理解教育をどう構築するか、その第一歩を模索するものにしたいと思います。

### 8. 参加費・懇親会費・弁当代等の振り込み先

- ①口座記号番号 00720-8-94533
- ②加入者名 日本国際理解教育学会第18回大会

### 9. その他

抄録原稿の提出締切りは、4月14日(金)必着です。また、大会参加費等の振り込みは速やかにお願い致します(最終期限として、5月30日を設定させて頂きます)。期日(2008年5月30日)を過ぎて振り込みなされた場合には、必ず「振り込み受領書」などの振り込みを証明できるものを受付でご提示下さい。振り込みが確認できない場合は、当日大会参加費を頂くこともありますので、ご了承下さい。(文責・田尻 信壹)



富山市近郊の地図

## 大会シンポジウム

### 学校の中の多文化共生の構築を目指して

富山大学 田尻信壹

大会シンポジウムは、「学校の中の多文化共生の構築を目指して」をテーマに、大会初日（6月14日）午後（14時～17時）、富山大学人間発達科学部で開催します。今回のシンポジウムは富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センターとの共催事業とし、会員ばかりでなくひろく市民・学生にも公開する予定です。

シンポジウムの司会、パネラーは以下の方々をお願い致します。

司会：森茂岳雄（中央大学）、永田佳之（聖心女子大学）  
パネラー：宇土泰寛（椋山女子学園大学）、所澤潤（群馬大学）、中村則明（とやま国際センター）、成田喜一郎（東京学芸大学）

今日、教室内に外国人児童生徒や帰国児童生徒の姿を目にするのは、特殊なことではなくなってきました。文部科学省の「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査」（平成18年度）によれば、公立小・中・高等学校、中等教育学校及び盲・聾・養護学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒数は、22,413人で、前回（前年）に比べて8.3%の増加とのこと。在籍人数別の学校数では、「5人未満」の学校が全体の8割を占めています。とりわけ、外国人児童生徒は、対人関係や学力保障の面で困難な状況下にあると言えます。現在、マイノリティに対する教育支援、マジョリティに対する共生へ向けての資質育成が課題となっています。

パネラーの内、宇土、成田氏はそれぞれ、小学校、中学校の教員を永く勤められたご経験をもとに小学校、中学校での多文化共生の学校づくり、学級づくりについてご発表頂く予定です。また、所澤氏には、大学での教員養成の面から、群馬県内で進めている「日系南米人増加の実態を踏まえた教員養成システム」に関してお話を頂きます。中村氏には、地域・行政の側から、富山県射水市で進めている「外国人・外国人児童と地元ボランティアの交流」についてご報告頂きます。

この度、シンポジウムの司会、パネラーをお引き上げ頂きました方には、感謝致します。とくに、所澤潤氏、中村則明氏は学会員ではありませんが、快くご協力頂きあつく御礼申し上げます。



新緑の並木 — 富山大学の夏

## 特定課題研究

### ユネスコの動向を踏まえた日本の国際理解教育—世界遺産教育を切り口としたESD—

奈良教育大学 田淵 五十生



木漏れ日の中の校舎 — 富山大学の秋

第18回大会の課題研究の現時点（2月末日）での準備状況についてご報告する。当日は、以下の陣容で行う予定である。

司会：田淵五十生（奈良教育大学）、小嶋祐伺郎（大竹市立栗谷中学校）

報告者：小林 亮（玉川大学）、手島 利夫（江東区立東雲小学校）、中澤 静男（奈良市教育委員会）、韓国側報告者（予定）

指定討論者：伊井直比呂（大阪教育大学附属池田高校）

日本の国際理解教育は、ユネスコの動向とは長い間、懸隔していた。ユネスコ協同学校（ASP net）に、全世界で179カ国、約7900校が加盟しているが、日本では24校に過ぎない（2008年2月現在）。

2004年、ASP netが日本でも設立されて、ユネスコが提起する教育課題に取り組むようになった。ユネスコは過去10数年前から「WHE」（World Heritage Education 世界遺産教育）に取り組んでいるが、2005年から「ESD」（Education for Sustainable Development 「持続可能な開発のための教育」）へ取り組みを強化している。「ESD」と「WHE」を個別に考えるのではなく、両者を統一した取り組みが求められている。

まず小林会員から、ユネスコの動向を踏まえて、日本の国際理解教育に示唆するものについて報告を受けたい。次に、ESDの先駆的な実践を行っている東雲小学校から、ESDの理念と捉え方を報告を受けて、それに基づいた実践事例も紹介していただきたい。最後に、全市内の小学校が「世界遺産学習」に取り組んでいる奈良市教育委員会の中澤指導主事から、どのような理念に基づき、どのように展開しているか、実践事例も含めて報告を受けたい。また、指定討論者の伊井会員からは、ASP netに関わった長い経験をもとにコメントを得たいと考えている。





## 大会自由研究発表に50題目がエントリー

日本国際理解教育学会第18回大会自由研究での発表を募集しましたところ、期日締切りまでに50題目の発表申し込みがありました。以下に発表者氏名(所属)「発表題目(主題)」を掲載致しますので、ご覧下さい(掲載の順番は発表申し込みの受付順です)。

### 自由研究の発表者と題目

1. 服部 孝彦 (大妻女子大)「児童の発達段階をふまえた小学校英語教育」
2. 高橋 順一 (桜美林大)「国際理解教育の題材としての捕鯨」
3. 笠井 正隆 (関西外国語大短期大学部)「地球市民の資質育成の視点からの大学英語授業実践」
4. 鹿野 敬文 (福岡県立福岡高校)「県立進学校におけるグローバル教育」
5. 中山 京子 (京都ノートルダム女子大)「日本人児童生徒がもつ先住民認識の問題」
6. 青木 一 (千葉市立打瀬中学校)「国際理解教育において獲得した資質や能力の応用・発展に関する実証研究」
7. 横田 和子 (聖心女子大)「国際理解教育における『聴くこと』の意味」
8. 福山 文子 (海外日系人協会)「第二言語話者の境界化回避に果たす移民学習の役割」
9. 植西 浩一 (奈良教育大附属中学校)「ESDの理念にもとづく生徒会活動」
10. 和田 俊彦 (明星中高校)「中学校英語教科書における国際理解教育の位置づけ」
11. 西尾 理 (兵庫教育大連合大学院院生)「平和教育における国家の捉え方に関する一考察」
12. 瀬戸 健 (高岡市立二塚小学校)「環日本海諸国との小学校授業交流の試み」
13. 野呂田順一 (かながわ国際交流財団)「文化人類学と国際理解教育」
14. バヤスガラン=オユンツェツェグ (日本大院生)「モンゴルにおける道徳教育の展開」
15. 野中 春樹 (広島なぎさ中高校)「ワークショップ『巨大魚が現れた』を通じた中高生の学び」
16. 大野 順子 (桃山学院大)「多文化社会に生きる高校生の社会認識に関する一考察」
17. 森川与志夫 (奈良県立法隆寺国際高校)「多文化共生社会における多様な『日本人』の子どもたち」
18. 山中 美子 (立教女学院短大)「保育者養成と国際理解教育Ⅲ」
19. 長浦 紀華 (北海道教育庁)「学校教育におけるESDの在り方について」
20. 竹内 宏 (鹿児島大)「ドイツにおける統合政策の現状」
21. 柴田 政子 (筑波大)「歴史教科書の国際比較調査」
22. 岡崎 裕 (プール学院大)「地域教育と国際理解教育の理念」
23. 藤原 孝章 (同志社女子大)「日本におけるシティズンシップ教育の可能性」
24. 若井 千草 (目白大)「日本語教師と日本語学習者の間のコミュニケーションに関する課題について」
25. 居城 勝彦 (学大附属竹早中学校)「音楽文化に対してよりグローバルな視点を持つための創作学習」
26. 松井 克行 (大阪府立三島高校)・藤原孝章 (同志社女子大)「国家間対立の克服をめざす参加型『平和学習』」
27. 小嶋祐何郎 (大竹市立栗谷中学校)・祐岡 武志 (奈良県立法隆寺国際高校)・谷口 尚之 (奈良教育大附属中学校)・南 美佐江 (奈良女子大附属中等教育学校)「『つながり』『多様性』『変化』をコンセプトにした国際理解教育の構築」
28. 伊井直比呂 (大阪教育大附属高校池田校舎)「A S P netを通じた日中歴史問題協同学習」
29. 今田 晃一 (文教大)・木村慶太 (立命館守山中学校)・日々野功 (東大阪市立盾津中学校)・手嶋将博 (文教大)「博学連携ワークショップ型教員研修の在り方についての考察」

30. 上別府隆男 (東京女学館大)「文部科学省の『国際教育』のゆくえ」
31. 秋山 明之 (神戸市立楠高校)「校外学習(姫路)に合わせたESD・世界遺産教育授業の開発」
32. 栗山 丈弘 (文化女子大)「新たな『相互依存』教材の開発にむけて」
33. 八代 健志 (茨木市立葦原小学校)「社会教育での国際理解教育の意義に関する一考察」
34. 近藤 牧子 (早稲田大)「日本における開発教育の運動の構造」
35. 石川 一喜 (拓殖大)「映像リソースを活用した地球市民的資質の育み」
36. 岸田 由美「留学生の宗教的多様性と日本の大学」
37. 石森 広美 (宮城県立小午田農林高校)「人格と市民性を高める教育活動に関する一考察」
38. 磯田三津子 (京都橋大)「在日コリアンと多文化教育」
39. 藤崎 隆博 (鹿児島大院生)「子どもの『社会力』を育成する国際理解教育の研究」
40. 田島 弘司 (上越教育大)「コミュニケーション能力の再考」
41. 釜田 聡 (上越教育大)・許信恵 (韓国教員大学校)・梅野正信 (鹿児島大)・二谷貞夫 (上越教育大名誉教授)「日韓相互理解のための歴史教育における諸課題について」
42. 丸山 英樹 (国立教育政策研究所)「欧州におけるイスラムの教育課題と社会的支援」
43. 風巻 浩 (神奈川県立麻生高校)「若者の国境を越えた『出会い』を創りだしてきたヨーロッパ市民」
44. 川端 末人 (神戸大名誉教授)「全球化時代の国際教育の理論的・実践的課題」
45. 市川 秀之 (名古屋大院生)「国際理解教育の射程に関する考察」
46. 木村 慶太 (立命館守山中学校)・山田幸生 (鎌田小学校)・手嶋将博 (文教大)・クマル＝グル (マレーシア工科大)・今田 晃一 (文教大)「博物館アウトリーチ教材の開発」
47. 鈴木 悦子 (太田市立旭小学校)・末永サンドラ輝美 (太田市立太田小学校)「外国語児童に対する算数科教育の実践事例について」
48. 小嶋 薫 (東京福祉大)「国際理解教育の実践例」
49. 井ノ口貴史 (京都橋大)「核戦争と子どもたち」
50. 藤村 泰夫 (山口県立徳山高校)「地域から考える 16 世紀の日本と世界」

※上記の発表の他、韓国国際理解教育学会の方々からの発表が追加される予定です。

### 自由研究発表での留意点

自由研究発表者の皆様は、以下の諸点にご留意頂き、発表準備を進めて下さるよう御願ひ致します。

#### ①発表抄録の作成について

発表抄録の作成は、発表要項(送付済み、大会ホームページにも掲載)の書式、見本等に基づいて、A4判2ページで作成してください。本年度は提出された原稿をそのまま原稿といたしますので、完成原稿をA4判でお送りいただきます。

抄録原稿の提出期限が4月14日(郵送・必着)となっております。提出期限に遅れますと抄録に掲載できない場合もありますので、締切りには十分にご注意頂きたいと思ひます。

#### ②使用機材について

発表当日、各会場には発表用設備として、自由研究発表申し込み用紙で使用申し出のあった方には、プロジェクター、VHS、CDプレーヤーが用意されます。パソコン・DVD等の機器については、各自がご用意下さい。また、設置も個人の責任でお願いします。設定に要する時間も、発表時間の中にも含むものと致しますので、ご注意下さい。

#### ③配布資料について

発表の際に抄録以外に配布資料が必要な場合は、50部をご用意ください。大会事務局に1部ご提出を御願ひ致します。

#### ④発表時間について

1発表あたりの持ち時間は30分です(発表が20分、質疑応答が10分)。フロアとの活発な意見交換のため、発表者は質疑応答時間が十分に取れるようにご配慮ください。また、係より、発表開始から20分後に「1鈴」、25分後に「2鈴」、30分後に「3鈴」をならします。「3鈴」の時には、発表途中であっても直ちに終了を御願ひ致します。



では、会員の皆様、富山でお待ちしております。

(文責・田尻 信壹)

雪の晴れ間のキャンパス — 富山大学の冬



# 韓国国際理解教育学会の報告

## 日韓交流を深めたトンヨン市での学会

近畿大学 服部 圭子



分科会での研究発表を終えて（右端が筆者）

### 韓国到着（大会前日）

第8回韓国国際理解教育学会がキョンサン大学トンヨンキャンパスにて開催され(2007年11月10日～11日)、日本からも11名の会員が参加した。関西出発組は11月9日に関西で集合しJALで一路プサンへ向かった。出迎えの貸切りバスで高速道路や田舎道を2時間ほど走った後、海岸沿いのリゾートホテルに到着。語学教育に携わっている私は車窓から街の看板を眺め、日本語がわからずに日本滞在外国の人々の心境を改めて思った。ホテル内の案内もすべてハングル表示であった。エレベータの音声案内で日本語の類似音を見つけて真似をしたりしながら、3日間の旅が始まった。

ホテルでは韓国国際理解教育学会の鄭会長がお出迎え。キョンサン大学主催の歓迎レセプションが開かれ、韓国の関係者や、日本・中国からの参加者とともに韓国式しゃぶしゃぶ（チョンゴルきのこ鍋）を味わい親睦を深めた。

### シンポジウム

開会式の後、前南北統一大臣パク・ジェック博士による基調講演と、引き続きシンポジウム「国際理解教育の概念再考」が実施された。キム・ジョンサツ氏は、韓国の国際結婚による貧富の差などの現状を社会学的立場から紹介し「人権教育と国際理解教育」について語られた。法整備などの対策、global justiceという基準の必要性は同じく多文化化する日本が学べるものであり、互いに国を越えて情報交換を行うことの大切さを痛感した。藤原孝章会員は「平和教育と国際理解教育」、中国のフーリン氏は「持続可能な開発のための教育と国際理解教育」、パク・ソンヨン氏は「多文化教育と国際理解教育」についてお話しされた。

### 自由研究発表

2日目の午後、私と中山京子会員は「移民」チームの中間報告を行った。北海道の学会時（2007年8月）の「日中

韓プロジェクト」ワークショップを機に始まった実践研究活動の成果である。「食」チームの栗山丈弘会員の発表もあり、プロジェクトが少しずつ展開しつつあることを感じた。石川祥一会員、釜田聡会員、小嶋祐何郎会員、藤原孝章会員、松井克行会員も日頃の研究成果を報告した。

夜のトンヨン市長主催レセプションには、開会と同時に多田孝志会長が到着。本務校での業務を終えて駆けつけてくださったが、お疲れも見せず3日間練習を行ったという韓国語での見事なスピーチをご披露くださった。韓国料理だけではなく、地元の中学・高校生による音楽演奏などもあり、アットホームな暖かいパーティであった。

### ワークショップ

3日目は朝からサウナ・垢すり体験をし、心身ともにリラックスしてホテルを出発。大学での日中韓ワークショップに参加した。各国の代表が「韓日中の国際理解教育の再概念化」について発言・討議した。多田会長は本学会の「未来の選択」の概念を紹介し、共創的対話の必要性や東洋の「和」の思想に触れ、東洋の思想を国際理解教育で重視することの大切さを訴えられた。多田会長のご発表に感銘を受けた韓国人参加者が、即興で英語の詩を作成し発表されるという一幕もあった。

### 繋がりを大切に

今回の韓国学会参加の大きな喜びの1つは、北海道で出会った仲間の会員との再会、一緒にカラオケで歌ったキム学会事務局長や共同研究者のヨー先生との再会であった。ヨー先生にはホテル内の売店でお土産の激辛ラーメンやお酒を選んでいただいた。その後、ユネスコのキム先生と差し入れしていただいたお酒やブリのお刺身を囲んで、他の先生方とともにさらなる懇親会を行った。リビング付きのコンドミニウムをフル活用し、韓国語・日本語・英語の言語や歌が飛び交う陽気な宴会となった。このような個々の親睦の積み重ねも学会間の交流、国際理解の原点となり得ることを実感し大切にしていきたいと思った。

最後に、韓国学会やユネスコ関係の皆様、学会を通して通訳をしてくださった元先生、事務局の中山博夫先生のご助力に心から感謝したい。



トンヨン市長主催のキョンサン大学での歓迎レセプション

## 国際理解研修会の報告

### 富山研修会

### 「移民を授業する」に参加して

富山大学大学院生 荒屋 誠



多田先生の講演に聞き入る参加者

11月23日(金)、富山大学を会場に富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター、日本国際理解教育学会が共催し、富山県教育委員会、富山市教育委員会、国際協力機構北陸支部および多文化社会米国際理解教育研究会の後援により「国際理解教育研修会 2007」が開催された。当日は例年の3倍に相当する76名の参加者のもと、多田孝志先生、森茂岳雄先生、多文化社会米国際理解教育研究会の先生方をお迎えして研修会が始まった。

### 午前の部から

午前のプログラムでは、インドネシア教育振興会 (IEPF) のスタディーツアーの報告後、「21世紀の国際理解教育の考え方・進め方」と題して、多田孝志先生の講演が行われた。現代の世界では、国家の枠を超えて人々が移動することが当たり前となり、日本においても外国人の割合が増えつつある。日本が経済的発展を今後も持続させていくためには、①定年の延長、②ロボットの更なる導入、③外国人労働者1000万人の導入が不可欠とされ、多文化共生時代を展望した教育を進める必要があることを力説された。近い将来、日本に住む人10人に1人が外国人という時代がやってくる可能性が高いのである。そのような時代を生きていく子どもたちに、異なる文化をもつ人々を受容し、「つながる」ことのできる態度・能力を育てること、自らの国の伝統・文化に根ざした自己を確立すること、自らの考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる態度・能力を身につけさせることが大切となる。特に、多田先生は、発言の機会をチャンスととらえることができるように、子どもたちのコミュニケーション能力を高めることの大切さを力説された。これからの時代には、自立と共生を基調とした教育が求められるのである。

### 午後の部から

午後のプログラムは、森茂岳雄先生、田尻信壹先生による「移民学習の視点と教材開発」の講演からスタートした。明治の初期から始まった移民は、アメリカ合衆国やブラジル、ペルーなど多方面におよび40～50年前まで続いたこと、アメリカでは第二次大戦中に日系移民が収容所に入れられ迫害されたこと、一方で移民の地位向上のためにアメリカ人として自ら志願し勇敢に戦った人々も存在したことなどを知った。そうした「移民」の存在が、現在の日本で日系ブラジル人や日系ペルー人の就労に深く関わっており、「移民」の学習が、グローバル教育と多文化教育の両方の学習内容の習得につながる。教科書ではほとんど取り上げられてはいない「移民」の教材としての可能性を発見することができた。

次に、小学校(中山京子先生)と中学校(織田雪江先生)の二つのグループに分かれてワークショップが行われた。私が参加したグループでは、中山京子先生から、小学校における移民学習の教材化の可能性について学んだ。実際に紙芝居、カルタ、BON(盆)ダンスなど様々な活動を織り交ぜてワークショップが進められた。中でも参加者全員で輪になって踊ったBONダンスでは、移民した人々が日本から遠く離れた異国の地でどんな気持ちで踊っていたのだろうと考えると胸がいっぱいになった。中山先生が単なる知識の習得ではなく、実感を伴った理解になるよう実践を重ねてこられたことがよく伝わってきた。その後全員が集まり、福山文子先生から博物館の効果的な学習への活用方法についての報告を聞いた。博物館の学校教育への協力体制の充実を知るとともに、こんな博物館の存在をより多くの教師に伝えていく場の必要性を強く感じた。

今後ますます、グローバリゼーションが進展するであろうことは明白なことであり、そんな時代に生きていく子供たちに「自立と共生」の精神を育てていくことの大切さを改めて認識することができる研修会であった。国際理解教育の最先端を歩んでおられる先生方のお話を聞いたり、ともに活動したりして充実した時間を過ごすことができた。



ワークショップで日系移民の労働着を体験(左は中山先生)



## 奈良研修会

# テーマは「世界遺産」と「ESD」

文教大学 今田 晃一

2008年2月23日(土)に奈良教育大学を会場として、本年度2回目の本学会研修会が開催されました。研修会の在り方につきましては、現状ではまだ様々な可能性を検討しているところでもあり、今回は田淵委員が委員長を務める第1回奈良市世界遺産学習実践研究会および奈良教育大学ユネスコ・スクール教育実践研究会との共催という形で開催されました。そのため主催が奈良市教育委員会、奈良教育大学、奈良国立博物館および日本国際理解教育学会、後援も奈良県教育委員会、(社)日本ユネスコ協会連盟および(財)ユネスコ・アジア文化センターという大がかりで充実したものとなり、参加者も学会員を含め、200名を越えるものとなりました。

### 全体会・3分科会に200名が参加

研修会は、基調講演を中心とした全体会と実践事例報告の分科会の2つで展開されました。テーマが、世界遺産とESD(持続可能な開発のための教育)という大変タイムリーで、奈良という地域の特性を活かしたものでしたから、小・中・高等学校の先生方はもちろん、地域のボランティアの方々が多かったのも今回の特徴でした。

#### 全体会(敬称略)

基調講演①「世界遺産とESDに期待するもの」秋山和男(文部科学省国際統括官付ユネスコ協力官)・寺山明人(ユネスコ協会連盟事務局教育文化事業部長)

基調講演②「奈良の世界遺産のすばらしさ」西山厚(奈良国立博物館教育室長)

#### 分科会(敬称略)

##### ●第1分科会

指定討論者：森本 弘一(奈良教育大学)・上田 啓二(奈良市教育委員会)

大西 浩明(奈良市立済美小学校)

『世界遺産のあるまち奈良』の「もの・こと・人」から榎本 克之(奈良市立田原小中学校)

キャリア教育の視点から見た世界遺産学習

小島源一郎(奈良市立椿井小学校)

私たちの世界遺産や校区を発信しよう

##### ●第2分科会

指定討論者：岩本 廣美(奈良教育大学)・山田 均(奈良県立教育研究所)

中澤 敦子(奈良市立平城西小学校)

世界遺産から平和を考えよう

西田 妙子(奈良市立鼓阪小学校)

世界遺産学習から地域を愛する心を育む

深澤 吉隆(奈良市立三笠中学校)

江戸時代の旅から奈良を再発見

##### ●第3分科会

指定討論者：今田 晃一(文教大学)・木村 慶太(広陵

町立広陵中学校)

祐岡 武志(奈良県立法隆寺国際高等学校)

世界遺産教育とESDの関わりについて

藤村 智子(奈良市立一条高等学校)

ユネスコ青年交流2006・2007

谷口 尚之(奈良教育大学附属中学校)

「世界遺産を通しての教育」への試み

### 「世界遺産」に関する様々な実践

報告された実践は、大きく「世界遺産についての教育」と「世界遺産を通しての教育」の2つに分けることができましたが、どの実践も最終的には自分たちの住んでいる「地域を見直すこと」を大切にしている点がとても印象的でした。世界遺産を通して、その上位概念であるESDにつながる提案性の高い授業が確実に奈良に地で、先進的に実践されていることに、参加者は大いに啓発されました。

世界遺産の学習はどこから、どのように始めたらいいのか。参加者の問いに対して「どこの学校にも、今までその地域に基づいて、学校が大事に育て、継続してきた実践が必ずあるはず。世界遺産やESDという切り口でその大事にしてきた実践を、学習者の興味に応じて再構築するだけです。まずはできることからやってみてください」という、実践者の力強い励ましに勇気付けられました。幸い、世界遺産学習には、奈良市教育委員会の全面的なバックアップもあり、奈良市の実践は、今後さらに充実していくことでしょう。

最後に、本学会会長と田淵委員から研修会全体への総括がありました。田淵委員は、まとめの中で、「総合的な学習の時間は、何を知っているかより、誰を知っているかである」「世界遺産は、観光資源だけでなく、豊かな教育資源である」など端的に、奈良発の地域とともに作る新しいプランの重要性を提案されました。そして「教育は、研究と違い、いくらでも人のいいところを盗み、学習者のためによりよい授業を実践しよう。そしてこのような実践研修の場をさらに充実させよう」と、会を締めくくっていただきました。関係者の方々にここに改めて謝意を表します。



充実した内容の分科会での報告

## 2007年度 理事会(各委員会等) 報告

### 研究委員会より

中央大学 森茂 岳雄

今年度から研究委員会では、新しく担当理事を中心に研究者、現場教員、大学院生等のグループによるプロジェクト方式で研究を推進し、公開研究会やワークショップを通して広く研究を会員に公開し積み上げ、最終的に研究大会時に特定課題研究としてその成果を発表、共有する機会を持つことを決定した。

具体的には、2007年度～2009年度の共通の研究テーマを「共生社会の構築と国際理解教育」とし、以下の三つの研究課題で研究を進めることになった。

(1) ユネスコの世界遺産教育と日本の国際理解教育(担当理事：田淵五十生)

ユネスコの世界遺産、特に文化遺産を切り口として、持続可能な社会の実現のための教育へと発展する国際理解教育の学習モデルを構築する。

(2) ことばと国際理解教育(担当理事：山西優二)

「ことば」のもつ多様な機能や役割を構造的、全体的に整理し、これからの国際理解教育の新しい実践に向けての課題や方策を提示する。

(3) 国際理解教育とグローバル時代のシティズンシップ(担当理事：嶺井明子)

グローバル時代におけるシティズンシップの解明を軸に、現代政治のダイナミズムも視野に入れながら国際理解教育の課題を検討する。

(1)については2008年度の、(2)については2009年度の、

(3)については2010年度の研究大会における特定課題研究を担当することになった。尚、最初の研究成果の共有の場として、(1)について今年2月23日(土)に、本学会の教育実践研修会を兼ね、奈良市世界遺産学習実践研究会、及び奈良教育大学ユネスコ協同学校教育実践研究会と共催で「世界遺産から持続可能な社会の実現へ」と題して、奈良教育大学を会場に公開研究会が行われた。

これら三つのプロジェクトについては、今後広く会員に共同研究への参加を呼びかけることになった。

### 紀要編集委員会より

同志社女子大学 藤原 孝章

現在(2007年2月)、第14号の編集作業中です。今回は、会員の投稿が16本と多くあり、研究、実践への取組みの成果が伺われて嬉しいかぎりです。ただ、全体のページ数の関係から、掲載本数が限られてしまうのは、痛しかゆしです。掲載に至らなかった会員の皆様には次号にもチャレンジして投稿をお願いする次第です。印象になりますが、学校現場が多忙かつ厳しくなっているためか、実践研究をふりかえり、まとめる時間が少なくなっているように感じております。

また、編集委員会では、次号(第15号)からテーマをもうけた論文集の掲載を企画し、理事会で、第15号は「世界遺産教育」、第16号は、「ことばと国際理解教育」、第17

号は「グローバル時代のシティズンシップ」と決まりました。これは、学会の研究委員会の特定課題研究に対応したものです。従来も特定課題研究は、毎年の研究大会で行われていましたが、紀要には「報告」に留まっていた。それを、研究や実践の水準を「論文」レベルまで引き上げ、会員から広く投稿を募った方がよいと考えました。

もちろん、自由投稿も受け付けておりますので、本年(2008年)6月中旬(14、15日)に開催されます富山大会でもふるって口頭発表をしていただき、意見を交換して、論文にまとめていただければありがたいです。

なお、第15号の投稿応募のメ切についてですが、昨年度は北海道大会が7月末にあったために8月6日を応募のメ切としていましたが、2008年度は、富山大会が、従来通り6月中旬に開催されるので、大会終了後1ヶ月の7月20日頃を目処に投稿応募のメ切としております。投稿を準備されておられる会員の皆様は、ご注意ください。

### 理事会より

日本国際理解教育学会事務局

昨年12月の理事会は、多田孝志会長の次のような挨拶で始められた。

「富山の実践研修会は70名以上の参加があり盛況であった。実践研究への会員の要望の高さを再確認した。研究委員を中心とした理論研究と実践研修会の成果が統合されていけば、国際理解教育の新たな地平が拓かれていくと考えている。」

第18回研究大会の準備状況についての報告に続き、韓国国際理解教育学会についての報告がなされた。日本からの参加者は全部で13名であり、全体で、発表者と参加者がほぼ同数で70～80名の参加であった。「日韓中の研究者が集うことには、大きな意義があった」、「日本の国際理解教育学会の研究は注目されていることが実感された」、さらには、「日本から多数の参加者が出席したことは、意見交換、成果の共有等ができよかった」との報告がなされた。

研究委員会からは、3年間を見通した計画案が提案され、「ユネスコの世界遺産教育と日本の国際理解教育」を来年度の重点課題とし、第18回大会の特定課題研究のテーマとすることが決定した。そして、2月の奈良での実践研修会の折に、富山大会の前段階の論議を深めておくという点も確認された。

紀要編集委員会からは、14号編集の進捗状況の報告に加え、15号からは特集テーマを設けることが提案され、承認された。

国際理解教育実践研修会(11月23日、富山大学人間発達科学部)での参加者が76名であり、従来の3倍近い参加者で盛況であった旨が報告された。インドネシア教育振興会(NGO)の報告、多田会長の講演、午後の森茂委員の講演、ワークショップのいずれもが大変好評であったとのことである。JICA北陸と富山県、富山市教育委員会からの後援があったという報告もされた。



# 「国際理解教育」関連学会の動向

## 日本グローバル教育学会の研究動向

愛媛大学 鴛原 進

両学会に所属する一会員として、日本グローバル教育学会の研究動向について、主だった3点を報告します。

第一は、日本グローバル教育学会は、2007年8月、学会創設10周年を迎えた点です。学会の前身である「日本グローバル教育研究会」の設立が1993年であるので、通算すれば15周年となり、2007年度は節目の年度です。それを記念して、日本グローバル教育学会編『グローバル教育の理論と実践』を教育開発研究所より出版しました。これは、グローバル教育の理論と実践を、学会が総力を挙げて体系的に整理・集大成し、到達点を示したものであるとともに基本的な事項に関する事典として機能を有するものでもあります。

第二は、当然なことなのですが、グローバル教育の多様性を再認識させられている点です。これは、学会の機関誌『グローバル教育』における掲載論文の多様性からうかがうことができます。第5～9号（2003～2007年、年1回発行）における論文題目の主要ワードは次の通りです。

### ●論文題目の主要ワード●

危機社会、学習方法、カリキュラム、文化と社会、歴史教育、帰国生徒、ディベート、新学習指導要領、学力、公共性、学校評価、バイリンガル教育的な要素、現代中国カリキュラム改革、オンライン、オープンクラス、対話力育成、大学英語教育、マンガ、NGO、人材育成

第三は現代的な課題とグローバル教育の関わりを探求しようとしている点です。これは、最近5年の研究大会のテーマからうかがうことができます。

### ●5年間の大会テーマ●

- |      |       |                                     |
|------|-------|-------------------------------------|
| 第11回 | 2003年 | 21世紀の多角的グローバル教育を考える                 |
| 第12回 | 2004年 | 現代世界とグローバル教育 - 理念・課題・展望 -           |
| 第13回 | 2005年 | グローバル・シチズンシップと新たな公共性 - グローバル教育の展開 - |
| 第14回 | 2006年 | 「国連・持続可能な開発のための教育の10年」とグローバル教育      |
| 第15回 | 2007年 | グローバル教育におけるニューシチズンシップ形成の課題と展望       |

以上の3点から、グローバル社会における多様性と現代的な課題、そしてグローバル教育に正対している学会、そこに集う会員の姿が見えてきます。

## 異文化間教育学会 2007 年度大会の様子

共栄学園短期大学 山田千明

異文化間教育学会第28回大会は、2007年6月2日（土）～6月3日（日）に目白大学新宿キャンパスで開催された。また、前日の6月1日（金）には、倉地暁美氏によるプレセミナー「対話からの異文化理解—文化の可変理論とジャーナル・アプローチを中心に」が行われた。

大会1日目には、特定課題研究「地域におけるニューカマー支援と連携—異文化間教育の視座から—」、ケース・パネル発表、ポスターセッション、善元幸夫氏による記念講演1「異文化にであうニューカマーの子どもたちの今と未来—グローバル化にゆれる新宿の光と影—」、アグネス・チャン氏による記念講演2「みんな地球に生きるひと—ユニセフ大使の活動から—」が行われた。

2日目には公開シンポジウム「多文化共生社会はどこまで可能か—新宿の異文化間教育的理解—」が実施された。また、個人・共同発表は2日間にわたり、外国籍児童（受け入れ側）、留学生教育（受け入れ政策）、多文化教育（地域受け入れ問題）、異文化理解教育・留学生教育（各国の授業観）、文化差異と異文化適応、移民政策（スウェーデンとイギリス）、海外子女問題、女性問題（異文化間適応問題）、アイデンティティと日本語教育（アジアでの語学教育）、異文化理解教育（メディアを使って）、異文化理解教育（受け入れ側）、外国語教育（日英語と異文化間教育）、外国籍児童（中南米）、異文化理解教育（日本のイメージ）の14部会に分かれて行われた。

どの発表も興味深かったが、アグネス・チャン氏による「植民地での生活」や日本ユニセフ協会大使としての体験についての講演には、多くの聴衆が魅了された。原裕視大会準備委員長の報告によれば、個人発表37件、共同発表5件、ケース・パネル発表5件、ポスターセッション9件であった（異文化間教育学会ニューズレター No.53を参照のこと）。

地元にこだわったという本大会では、記念講演1の善元氏が新宿区大久保小学校の教員、公開シンポジウムのシンポジストが新宿で地道な活動を続けている植村唯以、山本重幸、森田忠幸、中山弘子の各氏という人選で、地域に根ざした実践をベースにした各氏の発表は熱かった。同時に、日本語を母語としない会員がハンドアウトを日本語で作成し、流暢な日本語で発表するという発表者自身の多文化化、また発表テーマに、「バイリンガル教育」や「異文化間介護」が出てくるなど、異文化間教育学会の広がりを実感した大会でもあった。

## 会員だより

### 「カクレキリシタン」と異文化理解学習

朝日大学 高橋 健司

中学校や高等学校の歴史で文化史を教える際に、ある時代を彩る文化の代表的な作品名や人物名を機械的に覚えさせようとすると、生徒は文化を無味乾燥でつまらないものと感じ、また、文化とは過去の遺物であり、既に来上がっているものという印象を強めます。しかし、文化は時間の経過と共に生成され、変化を遂げていくものではないでしょうか。特に異文化と出会い、それを受容する過程では、文化変容が生じることが知られています。

例えば、長崎県の生月島に生月町博物館「島の館」がありますが、ここでは「カクレキリシタン」の歴史と文化にまつわる興味深い展示を見ることができます。一般的に「隠れキリシタン」と言えば、江戸時代に厳しい弾圧にもかかわらずキリスト教の信仰を守り通した人々というイメージで語られるのに対し、実際の島での信仰は、キリスト教由来の神と神道の神々、仏、そしてアニミズム的な精霊が共存する、重層的な信仰世界が築かれて現在まで受け継がれており、それは他に例を見ない島独自の文化を示しています。この意味で「隠れキリシタン」と「カクレキリシタン」を区別して用いる必要がありますが、私には、「カクレキリシタン」の文化は異文化との共存を考える上で示唆に富んでいるように思えました。それはキリスト教という異文化が、生月島の人々によって独自の解釈をされ、その土地の文化と見事に融合を遂げて受容されているからです。

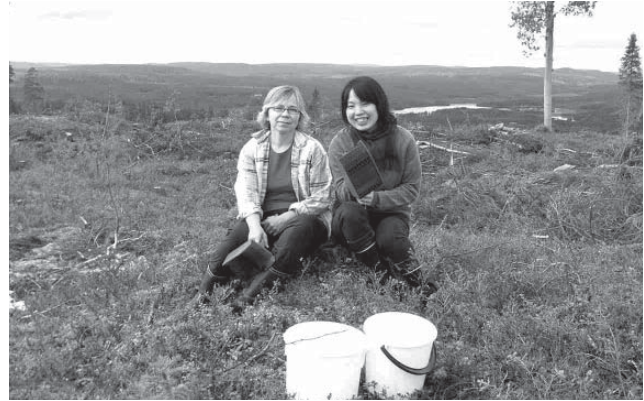
そこで昨年私は、「カクレキリシタン」の文化を、島に伝わる歌オラショや儀式を用いて教材化し、実際に中学校の歴史の授業で実践研究を行ってみました。その結果、中学生は単に「カクレキリシタン」の文化に興味を示しただけでなく、異文化が変容しながら受容され、新たな文化が生まれる姿に大きな関心を寄せたことが分かりました。ささやかな試みではありましたが、確かな手応えがあったと感じています



生月町博物館「島の館」

### フィンランドでの教育活動

立教大学大学院生 山田 祐子



ロバニエミの森にて、ベリー摘みの後 Jatta 先生と

私は、フィンランドの北極圏に位置するロヴァニエミという町の公立小学校においてインターン活動を行っている。そこで、日本についての授業を担当し日本文化や日本語について1～6学年の児童に教えている。フィンランドは国際的な学力調査の好成績で注目されているだけあり、学校に外国人教育関係者が視察にくることもある。

しかし、このように世界的に注目されているフィンランドの教育現場に入っている私は、フィンランドの教育において何か特別なことが行われているようには感じない、ということが率直な感想である。もちろん教師を中心に様々な教育的努力はなされているのだが、フィンランドでは何か特別な教育活動をしているから学力が高いのではと考えていた私にとっては驚きであったし、それが現状での私の率直な感想である。日本との違いとして感じていることとしては、学校現場でのゆとりが教師や児童の生活そのものに時間的、精神的ゆとりを与えているところである。

私はこのようなフィンランドの学校において授業を担当しているが、児童は日本文化の授業に対して関心が高い。実践を中心に授業は行っているが、高学年になると活動そのものからみえてくる日本人の考え方等にも関心を示す児童がいる。そこから私は自身の研究テーマである「異文化間トレランス」の異文化に対する寛容の側面が私の学校の児童には現われていると感じた。異文化に寛容であるから、日本文化も受け入れ関心をもつことができるのではないだろうか。しかし、葛藤を踏まえた上でより深い部分において異文化への寛容を児童がもっているかは今後の参与観察の課題であり、異文化間トレランスについて考える際に必要なことであると考えている。

北極圏という自然状況の厳しいこの地でフィンランドの教師・児童と関わることを通して、自己の研究である異文化間トレランスを中心に国際理解教育の視点をもちながら、今後もインターン活動を続けていきたいと思う。

(本稿は2007年9月にご投稿頂いたものです。)



## 帰国・外国人児童生徒の母語支援教室

大阪市教育センター 宋 英子



中国語母語支援教室の活動

多文化共生の教育の内容と方法に関する実践的研究を行い、研究内容は大阪市教育センター研究紀要に著し、公開している。また、大阪市の公立学校で学ぶ在日韓国・朝鮮人児童生徒と帰国・外国人児童生徒の取組を進めるプロジェクトの一員でもある。ここでは、帰国・外国人児童生徒の母語支援教室の概要をお知らせする。

帰国・外国人児童生徒は各学校に少数で在籍し、同じ言語の友達どうしが集い、交流することが困難である。日本語の習得とともに母語を忘れ、保護者と意思疎通のできる言語を失い、計り知れないストレスを抱え、教科学習や学校生活が周りの友達と同じようにできないことへの苛立ちから自信を喪失する。学級や学校の中で孤立し、登校を拒否したり、一人で帰国したりする児童生徒もいる。

2007年度、大阪市教育委員会は、帰国・外国人児童生徒の母語支援教室の実施に向けて歩み出した。ポルトガル語、フィリピン語、中国語、韓国・朝鮮語、タイ語の母語支援教室は、各言語、1回2時間、年間20回程度実施し、教科学習につながる日本語の習得と、母語を話すこと・聞くこと、書くこと、読むことを学び、同じ言語をもつ友達との交流を通して彼らの居場所づくりとアイデンティティの確立を図る場をめざす。

母語支援教室の運営に関わり、大阪市の公立学校に開設されている在日韓国・朝鮮人児童生徒の民族学級の足跡に学ぶことができる。公立学校にある民族学級は、同じ学校で学ぶ在日韓国・朝鮮人児童生徒が一つの教室に集い、民族講師から言語、文化、歴史等を学び、民族としてのアイデンティティの確立をめざす唯一の場である。また、学校や地域ごとの在日韓国・朝鮮人保護者会が組織されている。

母語支援教室は、次の可能性をもつと考えられる。まず、日本語の習得と母語の習得、アイデンティティの確立につながり、居場所を見失い、不登校になる児童生徒への対応に功を奏する可能性をもつ。次に、帰国・外国人児童生徒の教育権の保障を求めるうえで、保護者の意識を高め、コミュニティを形成する可能性をもつ。

## 恩師の言葉を胸に歴史的現在感のある授業に挑戦

中村高等学校 早川 則男

2年程前の会員報告で、全国の中高の教師11人で作成した「総合的な学習の時間」の教材集、及びそれに伴う普及活動である「あかり座公演」（米国理解研究会の活動：代表は日本大学文理学部教授渡部淳氏）から学んだことを紹介した。今回はその後日談。研究会は2006の4月年から「獲得型教育研究会」として発展し、初等・中等・高等教育の関係者、研究者を含めてアクティビティーの体系化とその普及を目指す新たな段階に入った。

毎月の例会出席は実現できていないが、極力参加するよう心がけている。発表・報告もさることながら、その後の議論が面白い。参加するたびに、思い出す言葉がある。それは大学院時代の歴史教育法でお世話になった横山十四男先生（元筑波大学教授）の義民伝承をテーマにした講義での言葉。「伝承はたとえ歴史的事実ではないにしても、そこには当時の人々の思想や信仰という歴史的真実が込められている」というもの。教材集では、このことを念頭に置き、物語的展開の歴史叙述を試みた。また、授業実践では第二次世界大戦の日系人強制収容所の疑似体験をティーチャインロールというドラマの手法を用いて行った。人々が過去の遺産を継承する際、時として想像の世界で真実が紡ぎなおされる。

この春、研究会はドラマ教育の世界的リーダーであるジョナサン・ニーランズ教授（ウォーリック大学）を英国から招いてワークショップを行う（案内は本紙15頁に掲載）。彼は、「想像された経験は、ドラマ活動を行う参加者に現実世界の質的体験をさせる」と説く。つまり、ドラマという想像世界は、参加者にリアリティーを感じさせることが出来るのである。虚構世界における「真実」の体験といえよう。多くの方の参加を期待したい。ドラマワークによって歴史的現在感が増す授業がどこまで可能か？恩師の言葉から気づかされた自分自身の問いへの挑戦はまだまだこれからも続く。



研究会での発表(写真は筆者)

### ニュースレター投稿のお願い

ニュースレターでは、ひろく会員の皆様のご活動をご紹介するために、「会員だより」の欄を設けています。「会員だより」では、以下の条件で、会員の投稿をお願いしています。

内容：現在の研究テーマや活動についてや国際理解教育に関する考え等  
分量：本文800字以内、写真（JPEG形式、デジカメ写真）1枚

投稿をご希望する場合は、お名前、所属を明記の上、事前に以下までメールでご連絡下さい。あらためて執筆のご依頼をさせていただきます。投稿希望者が多数の場合には、調整させていただきます。

連絡先 田尻信壹（富山大学）stajiri@edu.u-toyama.ac.jp

## 「移民」に関するプロジェクトに参加して

(財) 海外日系人協会 福山 文子

一昨年より2年間、国際交流基金日米センター（CGP）の支援を受けた「日系移民をテーマとした米国理解教育の教材開発と教員研修～多文化教育とグローバル教育のインターフェイス～」(研究代表：森茂岳雄)というプロジェクトに参加する機会を得た。このプロジェクトを通して、「移民」を授業及び教員研修で取り上げる意義、特にかつて移民の送り出し国であった日本の歴史的事実を子ども達に伝えることで、共生に必要な資質を獲得する可能性などについて学ぶことができた。

私はかつて言葉の不自由な学生として2カ国に滞在した経験がある。「一年以上、意図を持って通常の居住国を離れる者」を「移民」という(国連経済社会局人口部)なら、私も移民として暮らしていたといえるだろう。当時暮らしていた町で、朝通学の為に駅に止めておいた自転車が駅に戻るまでに壊されていたことも一度ではなく、髪が黒く肌が黄色い、可視的な「移民」に向けられる視線が厳しいことを実感した5年間だった。

異なる文化や価値観が会合するとき、新しい文化が生まれ、豊かになる可能性があると同時に、摩擦や軋轢が生じ得ることを私達は経験から知っている。

現在日本における外国人登録者は208万人を超え、永住者も84万人に迫ろうとしている。今後も確実に多文化化は進展していくだろう。日本に移り住んだ人々、これから移り住む人々との共生は大きなテーマである。彼らが抱えている問題に寄り添い、共感的に理解し、共に生きるために行動できる子ども達を育てるためにも、自分達の国・地域から百数十年も前から100万人ともいわれる移住者を各国に送り出した歴史的事実、日本人移住者の移住先国での貢献や苦勞を知ることは大きな意味がある。

2年間で学んだこと生かしながら、かねてより関心のあり方について今後考えを深めて行きたいと思っている。



「教員研修」で移民の農作業着を着て、感想を語る参加者

## ロンドン補習授業校での経験から

英国ノースハンプトン大学講師・  
ロンドン大学博士課程 阿部裕子



ロンドン補習授業校でおこなった「百人一首」大会

かつて公立中学校教諭であった私は、現職大学院生として米国ではアーミッシュの学校を、また、ブリティッシュカウンシル奨学生・ロータリー財団国際親善大使として英国でも様々な学校を訪問しては、日本の中学生と、英米の同年齢の子供達の様子を比較してきた。特に、とかく画一的だと批判される日本の学校教育と比べ、多様性を尊重した教育実践を目の当たりにして驚愕することが少なくなかった。中でもロンドン補習授業校での経験をここに記したい。

ロンドン補習授業校は、もともとは日本への帰国を前提とした駐在員家庭(いわゆる「帰国組」)のために設立された学校であったが、海外滞在経験が長い家庭や国際結婚家庭などの「永住組」の占める割合が年々増えてきていた。

私が担任をした中学3年は特に永住組の割合が多く、生徒間の能力格差が最も激しかった。帰国後の受験に備えて、いわゆる有名校進学のための学力向上をも期待する生徒もいれば、「ひらがな」の読み書きもおぼつかず、私の指示にも逐次通訳が必要な生徒もいた。家族皆日本人なのに、日常会話は英語で、「日本」とは、よく遊びに行く欧州より遙か彼方の国、との認識しかない生徒もいれば、インド人の母、英国人の父を持ち、日本人ではないのに日本滞在が長い為、学級の中で最も「日本人」らしい生徒もいた。

しかし、面白かったのは、これだけ能力に格差のあるのに、生徒は互いに尊敬し合っていたという点である。補習校では「最下位」だが、現地では誰もが羨む有名校に通っている生徒がいたこともあり、「国語能力の優劣」だけではない価値基準(例えば、休み時間のサッカーの上手さ・日本文化の豊富さ)を生徒が巧みに使い分け、それぞれの状況に応じて級友を褒めたり、助け合ったりする場面が多く見られ、皆とにかく仲が良かった。

一つの価値観で全人格までもが評価されがちな日本の学校を顧み、多様な価値基準の重要性を改めて考えさせられた。



## お知らせ —これからの行事／イベント案内—

### 2008年春のセミナー 「ドラマワークは教育を変えられるか?—イギリスのドラマ教育の現在—」

アイス・ブレイキングから演劇的手法によるプレゼンテーションまで、参加・獲得型の学習方法としてドラマワークを導入する機運が高まっています。「ドラマワークによって教育(学ぶこと/教えること)をどう変容させるのか」というテーマに取り組んできた獲得型教育研究会が、ジョナサン・ニーランズ教授(英国・ウォーリック大学)をお招きします。

ニーランズ教授は、ドラマ教育の世界的リーダー。多くの著作を通して理論的地平を切り拓いてきただけでなく、ワークショップの卓越したファシリテーターとしても広く知られています。また、ウォーリック大学大学院のドラマ教育学主任として、多くのドラマ教師を世に送り出してきました。

今回のセミナーでは、まずニーランズ教授の講演とワークショップを実際に経験していただきます。それを受けてニーランズ教授と獲得研代表の渡部淳教授(日本大学)が、日英の教育現場の状況、ドラマ教師の資質、日本の教育現場へのドラマワークの適用可能性などをめぐって対談します。最後に、会場全体で「コトバ、モノ、身体」という三つのモードを自在に駆使する学びのあり方や具体的な指導方法について考えます。

#### <記>

- 内 容:** (1) 開会セレモニー (10:00 ~ 10:10)  
(2) 基調講演 (10:10 ~ 11:10)  
(3) ドラマワーク・ワークショップ (11:15 ~ 13:15)  
    昼食休憩  
(4) 対談 司会: 小林由利子(東横学園女子短期大学教授) (14:15 ~ 15:45)  
(5) 質疑応答、閉会セレモニー (15:50 ~ 17:00)

(1) ~ (5) まで、すべて逐次通訳付です。

**日 時:** 2008年3月29日(土) 10時~17時 終了後、懇親会を予定しております(参加費別)。

**場 所:** 日本大学文理学部・百周年記念館 (京王線下高井戸駅より、日大通りを徒歩8分)

HP (<http://www.chs.nihon-u.ac.jp>) でご確認ください。

**講 師:** ジョナサン・ニーランズ(英国・ウォーリック大学教授)、渡部淳(日本大学文理学部教授)

**定 員:** 50名(定員に達し次第、締め切りとさせていただきます。動きやすい服装でご参加ください。)

**参加費:** 3000円 (懇親会についても事前にお申し込みください。)

**主 催:** 獲得型教育研究会

**助 成:** 日本大学教育制度研究所

**申込先:** Fax.045-901-4701 (獲得型教育研究会・事務局員自宅)、

**e-mail:** [kakutokugata\\_kyoiku@auone.jp](mailto:kakutokugata_kyoiku@auone.jp)

#### <申込み手順>

① FAXにて、下記用紙にご記入のうえ、獲得型教育研究会までお申し込みください。

② 事務局より FAXまたは E-mailにて、お申し込み受付確認の連絡を申し上げます。

(申込みより10日以内)

**参加費は当日、お釣りのないようにご用意下さい。**

FAX 申込み用紙のダウンロード等、詳細は、  
学会ホームページ (<http://www.kokusairikai.com>) をご覧ください。

# 事務局通信

## 新入会員

以下の15名の方が平成19年12月2日までに入会を承認されました。

氏名	所属	氏名	所属
北山 夕華	大阪大学人間科学研究科	秋山 明之	神戸市立楠高等学校
磯谷 純	札幌啓北商業高等学校	野口 恵子	立教大学大学院
上森 奈穂美	興部町立興部中学校	横山 美智子	小野町立小野新町小学校
草野 友子	江別市立大麻小学校	清水 敬明	富士常葉大学
東峰 宏紀	恵庭市立若草小学校	日比野 功	東大阪市立盾津中学校
堀 幸美	千歳市立末広小学校	松原 久	京都府立園部高等学校
明石書店		吉川 幸修	拓殖大学大学院
的野 記子	兵庫県立農業高等学校		

※前回掲載分での細谷倫子様（立教大学大学院）のお名前間違っていました。ここに記して、お詫び申し上げます。

## 寄贈図書

- 仲座栄利子著「アンドラゴジ理論の実践と効果の分析」『沖縄キリスト教短期大学紀要』第35号、2006年
- 仲座栄利子著「KEY ASPECTS FOR TAKING PARTICIPATORY APPROACHES IN RESEARCH, PROGRAM DESIGN AND INSTITUTION MANAGEMENT」『地域研究所報』第31号、2004年
- Eriko Nakaza 著「Social Context Surrounding Street Children in Brazil」『沖縄キリスト教短期大学紀要』第32号、2003年
- Eriko Nakaza 著「Value Education: A Case Study of the Dharma Bharathi-National Institute of Value Education for Peace」『沖縄キリスト教短期大学紀要』第32号、2003年
- 高尾隆著『インプロ教育：即興演劇は創造性を育てるか？』フィルムアート社、2006年
- 寺島隆吉著『英語教育原論』明石書店、2007年
- 西村克人著『日本は中国でどう教えられているか』平凡社、2007年

## 事務局からのお知らせ

### ◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様の関わられました文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がございましたら、学会にご寄贈ください。その際、助成金をいただいております公文国際奨学財団にも送らせていただきますので、できましたら2部お送りください。

### ◆年会費納入のお願い

当学会の活動は会員の皆様の会費でまかなわれております。今年度までの年会費未納の会員は至急会費をお支払いくださいますよう宜しくお願いいたします。

会費：正会員：8,000円 学生会員：4,000円 団体会員：30,000円

<郵便振り込み> 口座番号：0120-5-601555 加入者名：日本国際理解教育学会

### ◆住所・所属等変更連絡のご協力をお願いします！

事務局からの郵送物が「転居先不明」で返送され、また、会員のみなさまへのご連絡が滞ってしまっている場合が少なからずあります。所属変更によるお引越など住所・所属等に変更がありましたら、ファックス（03-5996-3166）または、Eメール（kokusai@mejiro.ac.jp）でお知らせください。また、会員種の変更もお知らせください。

### ◆紀要『国際理解教育』の購入手続きについて

現在、第1号を除き、最新の13号までの在庫がございますが、在庫が僅少の号も出始めております。学会ホームページにバックナンバーの総目次が掲載されています。ご希望の号数および冊数をファックスまたはEメールで事務局までお知らせください。振り込み用紙をお送りいたします。なお、会員の皆様には、会員価格でお求めいただけます。

### ◆学会ホームページのご案内

事務局の移転にともない、学会ホームページもリニューアルしました。研究大会やワークショップなどの情報はこちらでご覧いただけます。アドレスは次のとおりです。<http://www.kokusairikai.com>